

サッカーの五輪代表が好調である。アジアでの1次予選と2次予選を楽々と勝ち抜いて、サッカーには素人の私など、「もしかしら、本番でメダルを取れるかも…」などと、素朴な期待が膨らむばかり。この好成績は日本サッカー界における底辺からの長年の実力養成が実を結んだ結果であるが、同時に、代表のフランス人監督であるフィリップ・トルシエの手腕によるところが大きいはずだ。彼の采配を見てみると、これまでの日本人監督に比べて、際立った相違点がある。

フランスワールドカップの予選と本番を通して、日本人監督は、メンバーをできる限り固定して、レギュラーの選手が調子を落とさず、とにかく使い続けた。何よりもまず、代表選択の幅がかなり狭かったように思う。それまでの個人的しがらみや縁で選んだと言つと、少し言い過ぎか。

これとは対照的に、トルシエは、代表選手を選ぶに当たって、そもそも前歴や実績にとらわれずに多数の選手を台席に呼んで、その中で競わせた上で選択している。また、試合が終わると、「みんなよくやった。しかし、明日からはまたゼロから出発する。次の試合では誰にもレギュラーは保証されない」と宣言して解散するそうである。なんと痛快な人事か。前任者とはなんとおざやかな違いか。しかし、A代表の成績がパツとしないからか、これだけ五輪代表が勝っているのに、トルシエ支持は意外と少ない。特に、彼の言動に直に接するサッカー・ジャーナリストに、彼に対して低い評価をする向きが多

い。なぜだろう。どうやら彼の性格や振る舞いが、日本人から見ると、かなり特異であることが原因のひとつであるようだ。伝えられる所によると、彼は、周囲の人々に対してきわめて「率直」であって、自己の感情を包み隠さず、激しく接している。毀誉褒眨が激しい。なじる。グラウンド上でこっく。公然と誹謗し、侮辱する。逆らうと追放する。一言では、強権

フランス人の上司

中川 洋一郎

(経済学部教授・西洋経済史)



司の仕事の一部を遂行したりしている。この型の組織では、上司による命令ではなく、全員の同意が仕事のモチベーションに不可欠となる。

一方、欧米的な組織では垂直的にも水平的にも職務が限定されていて、指揮系統が明確だから、上司は部下に対して命令で仕事をさせる。

このような欧米に固有の職務分断システムに、フランス人に特有の過剰な自意識と民族的な自尊心を加え、さらに粗野なところをちよっぴり増幅すると、トルシエ的な権威主義的上司がでてくる。肉体と肉体をぶつけ合って戦うサッカーと経済活動であるビジネスとを過度に同一視することは慎むべきかもしれないが、それにしても私の見るところ、トルシエは、良くも悪くも、絵に描いたような典型的なフランス人上司である。

的。周囲からは、彼が権力の魅力を感じるままに堪能しているように見える。一般に、「彼はエキセントリック(常軌を逸している)だ」と表現されているが、これも致し方ないところか。

従来からの日本型の組織では、水平的にも垂直的にも職務間に共有部分がある。水平的に共有されているから、同僚が休んでも代替できるし、垂直的に共有されているから、部下も上

もちろん、「性格に癖があっても、怒鳴り散らされたら、フランス人上司の方が良い」などという意見がありうるだろう。誰よりも、トルシエに拔擢された選手たちがその言うに違いない。それでもなお、どうして抜擢されないであろうか。私は、「いやいや、フランス人の上司を持つと大変だろうなあ…」と密かにため息をつくのである。

五輪代表も、日産も、がんばってもらいたい。心底から、そう思う。

随想